

石井修道の道元研究への貢献

—道元の仮名・漢文テキストに見える中国禅の影響を検証する—

ステイブーン ハイネ

(若山悠光 訳)

石井修道（一九四三—）は、四〇年以上の継続的に卓越した経歴を残し、最近、駒澤大学仏教学部を退任した。それは当分野では日本最大の学部（従って言い換えれば、まさに世界最大）である。石井は現在、鈴木大拙（一八七〇—一九六六）によって一九四五年に創設された禅の資料の宝庫である、鎌倉の松ヶ岡文庫の文庫長をつとめる。しかし石井は西洋では、その道の権威—特に京都の禅文化研究所におけるセミナーを導く間、共に学び協力した、柳田聖山（一九二二—二〇〇六）や入矢義高（一九一〇—一九九八）ら、戦後日本の著名な禅仏教の研究者たち—に比べてあまり知られていないかも知れない。石井はある意味でこれらの研究者たちよりも重要だと言つてよいであろう。今日の異文化研究の学術的観点から、東アジア仏教文献解釈の方法論を見れば、石井のたゆまぬ研究は、極めて多くの出版物を世に送り出したことで特に注目に値する。彼の卓越した洞察力と新しい考え方により、中国と日本の知的・歴史的な遺産である古典的禅の伝統の形成と変化の要点を研究する事を通じ、その分野に大いなる貢献をしたと言えよう。

一 戦後の禅研究に於ける石井の役割

本論は、石井の全体的な成果のいくつかを取りあげ、簡単に概説をする。特に唐宋代の禅文献の極めて重大な展開に関する石井の研究について述べる。その研究を特徴づける主たる業績は、一二冊を越える著書（単行本と全集の一部を含めた）であることは疑う余地がない。同様に、二百を越える出版された論文があり、その多くはかなり長く、それ自体、研究範囲や内容において革新的である。石井の多くの出版の業績を考慮に入れると、この小論で彼の研究の全範囲の評価ができるはずはない。その代わりここでの目的は、鍵となるいくつかの点を選び代表させる形で、検討のための覚え書きとすることである。また一方、彼の集大成の中で採用されなかった研究方法や不十分な点を批判的な視点で考察する。

私の第一の目的は、日本曹洞宗開祖の道元禪師（一一二〇—一一五三）の伝記と思想に関する様々な視点からの研究についての石井の貢献を要約して述べることである。道元は一二二三年から一二二七年までの四年間、中国を旅し、そこで如浄禪師（一一六二—一二二八）の導きの下、身心脱落の経験を通して悟りを得た。日本に戻ると、道元は仮名『正法眼蔵』と『永平広録』という二つの主要な説法集を撰述する。仮名『正法眼蔵』は、非公式の説法（示衆）を収めたものであるが、主に京都の興聖寺と、人里離れた越前に初めて訪れた時の説法であり、一二四四年¹に永平寺を開く以前のものである。『永平広録』は、十巻中初めの七巻は、法堂での公式の説法（上堂）五三一を収めたものである。一二三六年に興聖寺で始められたが（巻一に一二六の上堂を含む）、中心となるのは一二四〇年代、道元が永平寺に住持した時の説法である（巻二から巻七）。

石井の学問的洞察力は、特に、二つのあまり世に知られていない道元の著作についての高度な専門的研究に明らかに現れている。石井は、道元の著作歴の中からより広範囲な事柄を、中国禅との関係において明らかにした。その一つは、『中国禅宗史話―真字『正法眼蔵』に学ぶ―』（一九八八）であり、一三三五年に撰述された解説のない三百の公案集、真字『正法眼蔵』の研究である。石井は、道元が出会った数百の公案を、それまでの中国の主要な解釈と異なる独自の解釈で受け入れ叙述したという点で、仮名『正法眼蔵』と『永平広録』の双方を理解するためにこの著作が不可欠であることを示した。石井のもう一つの著書『「正法眼蔵行持」に学ぶ』（二〇〇七）は、『行持』の巻の研究である（ハイン、二〇〇八）。この『行持』の巻（通常二巻に分けられる）は、仮名『正法眼蔵』に収められ、道元が曹洞宗と他の禅宗の流れを含めた中国の祖師から法を受け継ぐことについてどう見ていたのかを指摘した伝法のマニュアルとしての役割を果たしている。この二つの道元の著作は、それぞれ石井によって大変深い分析がなされているが、方向性はかなり異なり、むしろ正反対―一つは公案の包括的な収集であり、もう一つは祖師伝の概説―として現れている。石井は、これらの著作が道元の中国の禅宗祖師の教えに対する親密感と、特有の受け入れ方に関連していることをも示す。道元は中国の文献資料を受け入れるも、しばしば根本的に解釈し直して、宗教的到達点を描き、また法系図の中で後継ぎとなる弟子達に伝えて行く時の教育法を著している。

石井は、道元が中国文献の要点を凝縮しつつも、注意を喚起し、説得力のある方法で、当時の聞き手である日本の僧侶のために紹介し、解釈しようと努めたと明確に述べる。その頃、禅の書物は洗練された宋代の文学的な言葉で書かれ、実際何が書かれているか解らず、奇抜で不可解にさえ見えた。そのような中で真字『正法眼蔵』と『行持』の巻のテキストは解釈可能な手段であり、中国文献に精通した石井に、その成果を用いて、興聖寺と永平寺において迅速に成長した修行僧団の形成と改革に対する日本の開山としての努力を、推し量ることができるようにさせた。当時は幕府がすべての宗教団体を監督していた時代であり、同様に比叡山を中心とする主流の天台宗及び他の鎌倉新仏教の新興宗派が激しく競い合っていた時代でもあった。禅の宗派としては、臨済宗と新興の日本達磨宗の双方が交流しあい、禅宗を代表していた。さらに宋代禅（石井、一九八八）の発展という石井の専門分野は、曹洞宗の祖師である宏智（一〇九一―一一六三）と如浄（一一六二―一二二八）、加えて臨済宗のライバル大慧（一〇八九―一一六三）との衝突という重要な一面を含み、道元思想の成立ともなった。石井はまた、道元の著述に関して多くの異なる視点から膨大な長さの論文を残している。

もう一つの代表作『道元禅の成立史的研究』（一九九一）の中で石井は、批判仏教として知られる、当時革新的・解釈的アプローチと考えられた駒澤大学の学者達の間で物議を醸した論争に入っていくことを通して、道元の禅への独特のアプローチについて研究した。この方法は、袴谷憲昭と松本史郎によって一九八〇年代中頃に、曹洞宗を含む日本仏教に影響を及ぼした差別問題と、その他の社会的病弊についての質問に答える形で開拓され、道元が晩年に修行の本質における明らかな「心の変化」をどのように体験したのか継続的に議論された（ハバード・スワンソン、一九九七）。禅の靈性が一般社会の日常生活との相互作用を通して曖昧にされた時、道元にはどうやら厳格な倫理を欠かざるを得ないことへの気付きがあったようである。その気づきは、一二四六年から一二四七年間の鎌倉で

の六ヶ月の訪問で、新しく建設される建長寺に住持するという要請を断った、北条時頼との話し合いの失敗によって起こった。以後、道元は因果の法則を非常に強調するようになる。

批判仏教によると、この倫理的教えは、一二四〇年代の終わりから十二卷本『正法眼蔵』と言われる道元の新しいテキストに反映されている。そのテキストは、絶対的な仏性の普遍性の教義を内在している無律法主義との関わりを正したものであり、七十五卷本『正法眼蔵』の基礎でもあった。七十五卷本の編集は、仮名『正法眼蔵』の中心的な版本と長い間考えられてきたが、決して独占的な編集ではなく、その構成と普及は六十卷本と二十八卷本と共に何世紀にも渡って展開し、その中でまた重要な役割を果たして来たのである。

石井はこれらの同僚達の思考や理念を、借用して変形させながら、道元の仏性の教義の方向にあるさまざまな主張に対する批判に光を当てるために、自らの著書の十章のうち七章は「批判」という語を用いている。たとえば一、圭峰宗密の唐代禅の分類。二、口唱念仏の併用による宋代禅の主要な理解。三、幕府の勅令によって禁止された日本達磨宗の現世信仰は、重大な戒律違反であること。それに加えて、石井によると、道元は当時一般に禅思想の一部とされていたいくつかの疑わしい概念を論破した。四、見性。五、五位。六、本来成仏。七、靈性。さらに石井の著書には、日本達磨宗の創立者、大日房能忍 (d. 一一九四) に帰するテキストで、唯一綿密な研究資料として残る『成等正覚論』(一九九一a、六二六―七一四) の訳註研究が提示されている。

最近、ある評論家が、「見応えのあるスポーツの試合の流れを一変する技術に対して、その衝撃を表現する言葉はない」と述べた。同様の評価が石井の学問の評価として充てられる。彼の残した功績は何と印象深いことか。私はこの論文の準備として、その多くの例の中のひとつを引用するために、彼の著作のいくつかを読み直した。そこで私は「『四馬』考」(二〇〇一) など、以前読んだ時には十分注意していなかった多くの論文を発掘した。私は十二卷本『正法眼蔵』を含む、重要性が低いように見える部分の研究は簡単に比較的面白くないと思っていたが、実はそうではなかった。

『四馬』の巻については、原文と現代語訳の複雑で詳細な分析、それに「四馬」の意味を提供したのに加えて、この七〇頁を超えるかなりの量の論文もまた、より頻繁に引用しながら常に当惑させる七十五卷本『正法眼蔵』に含まれる『葛藤』の巻全体の考察を提示している。このつながりは、『四馬』の短い引用と『葛藤』の中心的課題を形作る菩提達磨章の皮肉骨髄説という、二つの巻の目立たない関係に基づいている。石井はまた、十二卷本『正法眼蔵』の、「『深信因果』」「『三時業』考」、「『供養諸仏』考」と題して、類似した一連の深い考察を生み出した。

石井の研究は、二つの主要な資質を交錯させたことで大いに賞賛されるべきである。第一は驚くほど詳細で几帳面な緻密さである。また、禅籍の原文に対する広い含蓄があり、それは写本の訳出と普及へのマイクロレベルに専念することから、殆どの部分がこれまであまり研究されていない古典的著作であるにもかかわらず、解釈の巧みさ卓越性を反映したマクロレベルの洞察に満ちた考察に渡る。第二の主要なクオリティーは、テキストの出版に関して、資料に富んだ学問的主題の偉大な修正者であり、禅の歴史と思想の複雑さを再編成するという、関連づけと統合についての抜群の能力を持つ。特に道元が中国の宋代と

日本の鎌倉時代をつなぐ架け橋として奉仕し、それぞれの時代に論議され討議されてきた教義と制度の複雑な相互関係の研究においてである。石井の学者としてのレンズを通して見ると、我々は中国禅が道元禅を学ぶのに不可欠な要素であり、そして日本の祖師たちも同様に禅の理解のために非常に重要であることが明らかとなる。その上で、それぞれの思想家と著作が、また著作に準ずる書物が、微妙な中身の違いによって混同されたり対立させられたりするべきでなく、むしろ賞賛を持って評価されるべきである。

彼の卓越した学識によって到達した事柄に加えて、一九七〇年代の始めに大学の研究室に集まって来た様々な世代の一流の国際的研究者たち²⁾の指導者として、石井は特に敬服と尊敬を集めている。それは、たゆまぬ自己反省と自己批判に導かれた、謙遜と忍耐強さ、そして卓越した学識者を生み出すことに専心した慈悲深い寛容の精神によってである。また石井が自身の人生の重大な転換点で、道元の意思決定の模範を心から尊敬していることによってもある。専門家としての研究の初めに石井の警咳に接した外国の研究者達は、テキストの批判的読解と同時に歴史の復元の展望を学んだ。そのおかげで、古典的な禅を多角的視点から扱うという現在の西洋の学問の輪郭を深く洞察するようになったのである。

同じ頃、ちようど鈴木・柳田・入矢が、擁護者の懸命な努力にもかかわらず、空想的傾向および「真珠の首飾り」の修辞法の誤謬から来る伝統的禅の説話を具体的に解釈したことについて批判を受けたのに対し、石井の研究は、時に現代の曹洞宗の観念的な宗教的事柄を促進する役割と受け取られた。東アジアの宗教思想の様々な側面で、不完全な点を批判する傾向にある、批判仏教の根拠を取りあげたことが石井を論争に巻き込んだ。時に皮肉にも道元像は、多くの論争や社会的評価から離れ、イデオロギーを超越した理想と、千年に一度の一人の天才として描かれた。そのことは一部の前近代的な仏教思想家や宗派の遺産にダメージを与えることになった。もし禅が現代の社会的な問題を引き起こす手助けをしたと言うならば、石井にとってはそれはむしろ道元の言動というよりも、禅師の研究に対する間違った理解と叙述の為である。さらに石井の研究は、宗派の偏見を反映しているようにも見える。それは道元が中国的禅理論と修行の融合方法を棄て、独自の日本主義を取ったことである。道元は優秀な実践者・観察者として中国で過ごし、自国に浄土宗や老荘思想の修行の悪影響を排除したものを輸入した(石井、一九九〇)。しかし石井はまた、道元がしばしば同胞の無知を攻撃しつつ、田舎者の理解を超えた真実ゆえに、大陸の伝統に対して称賛を惜しまなかったと言う。

これらのいくつかの批判の正当性を認めると同時に、その部分における現代の学問の発展の節目に気づくことも重要である。石井は基本的立場としては曹洞宗の通説に挑戦する立場に属している。一方、弁証法において、悪魔の安易な代弁者という皮肉な役割に陥ることのないよう、極端な立場を避けようとしている。彼は、厳格な調整と神聖と思われるテキストの材料と聖人伝の描写の型どおりの取り扱い方法を探り、克服することにはしばしば成功した。またその結果、多くの困難な方法論的課題に対して、中心的アプローチを形成し直すことに貢献したのである。

二 身心脱落について

石井がしばしば意欲的に挑戦した典型的な例は、身心脱落（石井、一九九一a、三三三、注一、四一五―四八六頁）に関する異なった言語上・歴史上の視点と、理論の緻密な分析である。道元の研究が西洋で進んでから過去四〇年余り、日本人の弟子に対する如浄の宣言が、本当に身心脱落であったのかどうか、または類似した表現の心塵脱落、つまり心の塵を払うことであつたかどうか、多くの学術的議論がなされてきた。後者の方が宋代禪の修辞法ではより典型的で、中国語の話し言葉の聞き取りに比較的不慣れであつた道元の耳には、ほとんど同じに聞こえたであろう。石井はこの語の語源研究についていくつかの興味深い提言をすることにより、この議論に貢献している。しかし、ここで私は西洋の読者に余り知られていない二つの問題、いったいいつ、どこでその経験をしたかという別の問題について注意を喚起したい。上記の表現の変更の問題は、『建撕記』や『伝光録』などの伝統的原資料に対する批判的議論による宗派的教學の最も根底に存在する。石井は上記の後の資料、曹洞宗第四代の祖師である瑩山紹瑾（一二六四―一三二五）の著作の中のいくつかの記述を初期の禪の祖師の記述と比較することにより、宋代の燈史に何が含まれているか、詳細な批判的分析を試みている。

石井の目指す所の一つは、研究者、杉尾玄有によつて始まつた議論を敷衍することであつた。それは、一九七七年に出版され、「叱咤時脱落」の誤りを、わざと作られた虚構だと論破することによつて大きな反響を呼び、盛んに議論された論文である。石井の考えは必ずしも道元の悟りを「面授時脱落」に基づく意見に取つて替えるという杉尾の論理を支持するだけではなかつた。「叱咤時脱落」とは、周知のように、道元の隣に坐つていた僧が坐禅中に居眠りをしていて如浄に厳しく叱責されたのが道元の悟りのきっかけとなつたという出来事である。その悟りは、その夜の独参により師から認められた。一方、「面授時脱落」とは、道元が数週間前に初めて如浄に出会つた時、強烈な精神的経験により、悟りを体験していたというものである。多くの曹洞宗の祖師伝によると、それは夢によつて運命づけられていたことになつている。

この件に関する石井の理解を要約すれば、彼は非常に注意深く以下のように説明する（一九九一a、四三九―四八五頁）。上記のような話は、既に疑わしいと認められる前近代仏教の偽りの歴史資料によつて立つ伝説に違いない。なぜならそれらは、道元の信心深さを美化した偏見に満ちた物語とする為、長い時間をかけて意識的に作り直されているからである。石井は、原典の歴史的研究を通して作られた話の殻を破壊する必要があるとしても、坐禅の重要性に関する道元の教えに内在する基本的本質に、感謝をもつて気づくことを損なわせてはならないとあえて提言する。「面授時脱落」もまた、伝説に基づいている。しかしそれらは少なくとも道元自身の言葉によつて、仮名『正法眼蔵』の『面授』の巻に表されている。しかし彼がこの文脈の中で「身心脱落」の語を実際に使っていないことは問題である。なぜならそれは瞑想修行の重要性を否定すると取られかねないからである。もし人が単に正しい師に出会つて悟りを開けるなら、坐禅は必要ないことになる。従つてそれについていくつかの別の考えが杉尾によつて示唆された。「身心脱落」の本当の意味は、特別な時間の瞬間に誰かに起こつたことではなく、継続的坐禅修行に完全に没頭した結果という、はつきりとしなない経験を言っているのかも知れないし、そのように見ることが好ましい方法なのかも知れない。それは、無所得の禪定を通して起こる禪的覚醒の一次性の性質について書かれた道元の著作の多くの部分と一致する。

同じ研究仲間の主張を和らげるこれらの分析をする一方、石井は道元が教授方法の中で独自と言える公案解釈のスタイルを開発したと主張する。「『正法眼蔵行持』に学ぶ」の終わり近くにある論文「なぜ道元禅は中国で生まれなかったか」(二〇〇七、五五六―五八〇頁)で、石井は、道元の独自性を構成する核となるものを取りあげている。つまり道元は、知り得た問答を決まって独特な読み方で解釈しており、決して中国語に基づく読み方に依存してはいないとする。いくつかの道元の教義に関する石井の分析の中に「日本の展開」という視点がある。これは文化的例外を意味しているのではなく、理論と修行における禅師のアプローチに関して、中国と何が異なり、何が新しいのかについて評価しているのである。

石井は「なぜ道元禅は中国で生まれなかったか」の論文を、自らの師であり駒澤大学において長い間道元学を導いてきた、鏡島元隆(一九一―二〇〇一)への賛辞から始めている。鏡島は一九五一年から一九九九年の間に、一六の著書を発表し、そのすべてが道元に関するものであり、他に類を見ない特徴を持った道元の教えを絶えず強調した。そして石井は、その論文を南嶽磨磚の公案の長い分析で終わる。道元はその公案を真字『正法眼蔵』第八、仮名『正法眼蔵』の『古鏡』『坐禅箴』『行持』の巻など多くの部分に引用している。道元はもはや不合理なことを呼び起こすことがないように、あるいは坐禅による成仏などなく、無益な行為だとすることがないよう、普段から型にはまった言い回しを避け、話の解釈をひねって用いる。むしろ道元は、どの瞬間も仏性に気づく可能性を完全に実現するために、修行者が坐禅修行を続ける必要性のあることを示す為の譬喩として、磚を磨くべきだと勧めるのである。

三 中国禅から日本禅へのかけ橋としての道元の役割

石井は退職に当たり、二〇一四年一月二十四日、「中国禅と道元禅―その連続と非連続―」(二〇一四)という題で最終講義をした。この主題は、石井が文献を共有できる同一の領域において概念の交換を調査するために、双方の地理的―文化的―言語的差異の間で心地よく働いていると同様にそれを通り抜けていることを強調している。しかし彼はまた、道元の主な著作の構造理解に関係する、中国原典の専門知識を持ち出す必要性を喚起している。禅の祖師方とその語録の広大な影響に、禅師がどれほど恩を受けているか―しかし同時に距離を取っているか―。彼は道元が自分自身を宗派の開祖や禅宗の一員というよりも、むしろ法の相続者と考えていたことを指摘する。しかし近代の学者達は、日本または中国の仏教研究において回顧的な特別なレンズを通して彼の思想を見る傾向の下にあり、中国仏教研究の分野でさえ、まだ鈴木木の唐代禅対宋代禅という、ある意味時代遅れの分類の観点から、多くの研究者たちによって分類されているに過ぎない。

石井の中国禅の取り扱い―その多くは道元禅についての発表に真剣に取り組む以前の、研究生活の前半に著されている―は、唐代と宋代の双方の基本的典籍に及ぶ。それらおびただしい出版物からその文献の構造や制作に関して、またその版や編集の由来、加えて論評や改訂のイデオロギー的な意味を含め、甚大な深さと詳細さをもって調査されている。石井によって考察されたいくつかの文献は、『六祖壇経』『江西省を本拠とする有名な洪州宗の文書(裴休拾遺問)』、さらに『百丈清規』である。これらの三つのテキストは、

それぞれ唐代に禅が勃興する初期・中期・後期の極めて重要な段階に撰述されている。石井の唐代研究はまた、石頭・洞山・曹山の語録を含む中国初期曹洞禅に特別に焦点を当てている。それらは宋代に復活し、やがて日本の鎌倉時代の曹洞宗の中で道元に変容されるという特質を持つ。それは、禅師が望んだことではなかったが…。

石井は、法燈伝授の記録である『景德伝燈録』、同様に『碧巖録』、公案を集めた『無門関』など、主な宋代のテキストについて広範囲に著述している（『宋代禅宗史の研究』一九八七）。彼の曹洞宗における強調点は、宏智・如浄に加えて、投子・芙蓉・丹霞ら宋代の禅師に続く。しかしまた臨済宗の新時代を築いた圓悟や大慧についても広く扱っている。彼の集成資料の検証には、宋代と唐代の主な話題がしつかりと網羅されていることを示している。石井の宋代資料の扱い方は、公平な考察という点から注目し値する。と言うのも宋代は禅宗の歴史の中で最も急激に多様な考えが生まれ、しかも分別された時期である。それは大慧によって主張された「公案を内観する（看話禅）」と、それに対して、宏智に帰する、「静かに照らされることによる瞑想する（黙照禅）」の対立というキーワードによって一二世紀の議論を説明することによって、日本の伝統の全面的解明に長い影を投じているように見える。

石井は、積極性と消極性、発言と沈黙の両極の基本的誤解のいくつかを、ほとんど自力で訂正している。それは宗派の論争を通して一世紀に渡って形作られてきたものであり、近代の学問の多くの実例で、慎重な考えなしに繰り返されてきた。特に公案を内観する立場（看話禅）と黙照禅は思っているよりもっと複雑で微妙な差異がある。それゆえこれらの概念は党派心の強いライバルや中立のオプザーバーたちによって分類されるべきではない（シュルッター、二〇一〇）。石井はまた、道元の只管打坐の立場がどのように身心脱落に関係しているかを詳細に説明する。それは変化に富み複雑で、必ずしも宏智の坐禅の方法に直接従う必要はないのだが、別の角度から、道元はしばしば宋代の祖師の文字通り優れた能力を見習うべく探求した。

石井は、『永平広録』の膨大な部分を詳細な分析を通して論証する。その中で道元は曹洞宗の祖師方の表現をある段階までは一語一句言葉通り引用しているが、瞬間的に微妙に変えているのである。この修辭的テクニクは、如浄や幅広い種類の中国の祖師方（石井、一九九一b）との結びつきにも用いられる。石井によれば、道元は坐禅に関する悟りの問題について、宏智の坐禅から悟りに導く視点から考える方法、また反対に、大慧の悟りから坐禅を見るという方法とに分けてアプローチしている。

石井が、中国禅語録の専門知識を道元学へと進めるために関係づけた二つの重要な要素がある。一つの要素は、道元の創造的な公案の収集と、燈史の相伝に関わることである――道元の初期の段階で特に目立った傾向、つまり彼は自身のスタイルで教義的な布教をした――。一方また、これらの材料を使って、現代の研究者が非常に深いところで宋代文学の複雑さを見ることのできる一種の窓として、何を学ぶことができるかを割り出している。石井は、それまで研究されていなかった宋代の禅籍、『宗門統要集』（二〇九三年成立）³）に大きく影響された真字『正法眼蔵』や、道元が漢文で書いた『永平広録』などの中の公案の役割を理解することは、極めて重要なことだと、説得力をもって証明した（一九八八）。

二つ目の要素は、何人かの批判仏教者が主張するように、道元の禅修行の視点が、専門

的な立場の後半生、他の日本の宗派、禅宗及び禅宗以外の仏教のやり方から、より孤立的になるに従って変わっていき、またそれがどの程度かという評価（思想的变化）にかかわることである。そして彼は、業の報いの原理に基づく倫理的問題を、より大きく強調していく。批判仏教は、もっぱら道元の僧としての生涯の最後の数年に撰述された十二巻本『正法眼蔵』の役割についてのみ焦点を当てる傾向がある。しかし石井は、『永平広録』や他の漢文典籍に反映された道元の生涯の最期を注意深く研究すれば、道元が大陸に旅した時に学んだいくつかの中国の修行生活のモデルを移設したことがわかると言う。

四 公案の相続者であり解釈者としての道元

これらの解釈上の要素はどちらも、中国で入手した禅語録に関する道元の包括的な知識が、彼のひらめきに現れた宗教ビジョンを異なる方向に駆り立てたことを論証する。それは彼が一二二七年日本に帰国してから興聖寺や永平寺での化導期間に、寺の建築や著述活動の確立を通して、死に至るまでの約二五年に及ぶ間に多様な資料を使用したことに基づく。石井に先立つ先行研究の一般的傾向は、田邊元、西田幾多郎、唐木順三ら京都学派の哲学者たちの著作と、和辻哲郎（一八八九—一九六〇）による一九二四年の影響力の強い著書『沙門道元』によってリードされていた。道元は典型的な前近代的日本の哲学者として、古典的仏教文献がほとんどいつも漢文で書かれていた時代に、慣習を破って口語文體で書いたことでよく知られている。仮名『正法眼蔵』、特に七十五巻本は、道元の初期の入宋時代に受けた教えに関する業績の絶頂と考えられた。宗派的傾向は江戸時代に由来し、道元の著作を宗門外の者から研究の対象とされることを避けようとする傾向があったが、曹洞宗内外の近代の解釈者は、豊富な訳文や研究を生み出すことによって、このパターンを覆してきた。

二〇世紀の間、道元の漢文文献はほとんど又は全く注目されず、禅師の全著作の中では不可欠な部分というより、おそらく付属品か欠陥品と見られてきた。中でもひどく不当な評価を受けた著作に、真字『正法眼蔵』、『永平広録』また『宝慶記』がある。『宝慶記』は、如浄と道元の間に関わられた指導的会話集である。道元は外国人といえども一二二〇年代の中頃の中国で、如浄の主要な弟子であった。道元の第一の弟子である懐奘は、この著作を道元の死後に発見した。道元について正しく理解しようとする点において、道元の生涯の最後の段階における他の作品と思想的類似点があることから、石井は主要な研究者達と同様にその著作を、道元の旅した時に基づく作品ではなく晩年の回顧録と考えている。

石井に先立ついくつかの重要な業績は、仮名『正法眼蔵』に取り入れられ、また今まで以上により高く評価された道元の漢文に反映された中国禅の影響の重要性という、新しい強調点に移る兆しを少しづつ見せ始めていた。その第一の例は、おそらくこの分野で二〇世紀に最も重要な著作は、道元が使った中国禅籍の引用の研究の草分けとして知られる鏡島元隆によって著された『道元禅師と引用經典語録の研究』（一九六五）である。

鏡島は、道元が多数の中国祖師の語録、また同様に『法華経』や他の經典から引用した語句の詳細なリストを作成した。そして又、道元の言葉遣いの巧みさに関していくつかの興味深い理論を提示した。この著作はほどなく大きな広がりを見せ、この分野のすべての

研究者達の基本的な辞書⁴となった。鏡島は中国の影響は道元の著作の翻訳や解釈のいかなる試みにも圧倒的な重要性を持つことを示した。反対に『正法眼蔵』と『永平広録』は、道元が禅の原典を興味を引くような個人的な方法で引用したことを理解するのに極めて重要である。道元はそれらがもとと含まれている語録から直ちに正確に引用し、行間の解説を通して文法的意味的構造を徹底的に改変したのである。

石井の研究に大きな影響を与えたもう一つの重要な学術的發展は、二〇世紀初頭に三巻のうち中巻の百の公案が確認された後でさえ長い間偽造と考えられてきた真字『正法眼蔵』という新しい焦点である。一九八七年、河村孝道は『正法眼蔵の成立史的研究』を出版した。それは真字『正法眼蔵』全体の妥当性を証明すると共に、仮名『正法眼蔵』の内容と形式を研究するために不可欠な資料となった。河村の主な目的は、漢文文献を道元が生涯編集し続けた六十巻本『正法眼蔵』を立証する理論に結びつけることだった。その理論は、もともと江戸時代の学者、天桂伝尊によるもので、伝統的な文献である永平寺第五世義雲禪師（一二五三—一三三三）の頌に基づいている。この問題は、十二巻本『正法眼蔵』に関して批判仏教から起こった論争とは別の議論を意味する。しかしどちらの議論も七十五巻本の優位を問題にしている。七十五巻本は、道元の弟子の詮慧と、その弟子の経豪による、一四世紀初めの大きき影響力をもった注釈書『御聞書抄』において好まれた。

河村は、真字『正法眼蔵』に含まれる公案の主な原典を、宋代第一の燈史、一〇〇四年の『景德伝燈録』であると示した。しかし一方、鏡島は中国の語録の役割を強調した。また河村は真字『正法眼蔵』は、道元が仮名『正法眼蔵』に含まれる説法を發展させる準備として保持した一連のノートかメモであると信じたのに対し、鏡島は如浄の下で道元と共に修行した中国僧寂圓が一二三〇年代の初めに日本にやって来て、昔の法兄の立ち上げた共同体に加わったため、興聖寺における彼の存在が道元に漢文の創作の重要性を思い出させたに違いないとしている。

中国の影響をいくらかでも知ることは、道元学の世界で不可欠のことであろう。石井の研究の特徴は、道元の引用箇所について、燈史、公案集、語録などの宋代の資料に関して、他の研究者よりはるかに詳しい調査がなされていることである。鏡島は語録の役割を強調し、河村は『景德伝燈録』を重視し、石井は『宗門統要集』の道元の著作における強い影響力について明らかにした。道元は『景德伝燈録』や他のいくつかの燈史について言及するが、『宝慶記』でも『正法眼蔵随聞記』でも『宗門統要集』については言及していない。しかし石井は徹底した一つ一つの分析から、宋代の語録の、一見してむしろ変わった資料を優先的に論ずる。『宗門統要集』は、聖文書的な句を初めの部分に限定し、残りの一〇巻には公案の大量列挙が続いている。しかし宋代の公案集は、一般に散文や頌の中に、歴史的背景や哲学的解説が含まれているものが多いのである。

石井の理論によると、一二三三年道元が中国の港の寧波に着いた時、まだ天童山に入る前でさえ、『景德伝燈録』と『宗門統要集』という二つの文献の感化を受けていたという。それらはいわば一組として仏教の求道者たちに配布されており、後に公案を覚える「トラの巻」として機能していた（石井、一九九八、五三二—五四五頁）。一一六六年からパターン化され、よりよく知られていた『宗門聯燈会要』によって定型化された『宗門統要集』は、公的な理由によるのではなく修行生活の中で学習の道具として書かれたものである。従って近代の『大正新修大蔵経』からも除外された。しかし『宗門統要集』は栄西が日

本の最初の祖師となった臨済宗黄流派の中心的燈史であり、道元は初期の頃、榮西が京都に開いた建仁寺で、中国行き準備としての学びの中で、影響を受けた可能性がある。

石井は、道元の用いる公案がなせたびたび『景德伝燈録』のものと異なるかを、そしてまた道元のいくつかの宋代の語句の引用が中心的燈史の中に出典を見いだせない理由を説明するのに、いかなる事象にも『宗門統要集』を考慮に入れることが助けになるという。石井の研究による打開策は、記録された言葉のみを強調していた鏡島の一九六五年の草分け的著作を、二〇年以上たつて改訂にとりかからせた（一九八七年）。鏡島の新たな著作は、燈史と公案集のジャンルが果たす重要な役割について説明する。その双方が『宗門統要集』によって結合され要約されているのである。鏡島は石井によって考え方の重要な方向転換をさせられたことを認めている。批判としてそれが発表された時、彼の貢献を支持する者に、石井はさらに『宗門統要集』を明らかにすることが、道元禅の学びを制限するものではないだけでなく、その起源を学ぶのに重要であり、それによって『碧巖録』や『無門関』を含む宋代の公案評釈集や、他の多くのよく知られていないが同様に価値のある用例を適切に読むのに重要であると論じた（石井、二〇〇〇）。

五 批判者としての晩年の道元

しかし真字『正法眼蔵』については、その出典や影響について多くの異なる見方が広がっている。そしてその論争が究極的に解決するかしないかにかかわらず、最終的な論点は、道元が豊かで伝統的公案の広範囲を受け継いだかということである。公案は、仮名・漢文にかかわらず独特の方法で道元のほとんどすべての著作に取り入れられている。それらの著作は、初めは口頭説法を筆記する形で継続的に生み出された多種多様な著作である。石井は中国典籍の多様な影響の中で、道元の生涯の業績を段階ごとに辿った。彼はまたそれが道元の日本達磨宗―道元が大日能忍による無律法主義の教義を軽蔑したところ―との出会いであったと言う。能忍は中国へ渡ったことがないが、一二四〇年代の初め、日本達磨宗が糾弾された後、弟子たちが永平寺で彼の活動に加わることに快く応じた。それは道元の「修証一如」の修行方法を形作る明らかで主要な対機（文字通り云えば「参加の機会」）となった。

批判仏教が沸き上がる以前、曹洞宗の正統の考え方は、道元の教えはどのような多様性や変動の現れにもかかわらず一定で変わらないとしていた。逆に日本の仏教学者達から発展した別の修正主義者たちの考えは、一般に曹洞宗を率いる道元が、一二四三年に京都を離れ、その後間もなく七十五巻本『正法眼蔵』の編集を完成し、再び回復することなく亡くなった衰弱期にまで拡大して結びつけることをしない。しかし晩年を中心とした分析は、伝統を軽はずみに受け入れることを正す視点から多くのメリットがある。石井らの研究の光によって明らかになった、この立場からの問題点の一つは、ちようど仮名『正法眼蔵』と同様に独創的な後代の主要な漢文文献である『永平広録』の重要性を単純に見落としていたということである。しかし道元はなぜこのような修正をしたのであろうか。もし彼が特別の必要性に合った言語形態で異なる聞き手を対象としていたのなら、寺を都市に構えていた時より、地方にいる時に、そこでたとえ少数の僧侶達が彼の口称説法について来られたとしても、何の為に漢文を使ったのだろうか。

批判仏教は、劇的な移行があったことを認めるといふ点において退化命題に同意する傾向にある。しかし一二四〇年代の終わりに鎌倉行化の後、永平寺に戻ってから起こった道元の態度の現実的变化は、受動的な禅定を伴った神秘主義による退化と捉えるより、むしろ能動的な智慧の倫理に傾倒したことに基づく新生または霊的復活と捉えるべきであると主張する。このように反対の解釈に基づいて道元の最期をどう定義するかは、それぞれにゆだねられ、それが一二四三年に始まったか一二四七年かは、小さな区別ではない。五年にも満たない議論であったが、道元が経験した変化の重要性を評価するという観点においては、方法論とイデオロギーの立場から多くの問題があった。

石井は、鎌倉行化の直後に起こった決定的な変化の維持と、このように道元の生涯の最後の最後、または晩年という語句を強調することにより批判仏教の仲間入りをしたのである。道元の問題は、その本意が不明確であることにより、信者達を怒りの感情に導くかも知れない多様な地理的文学的翻訳のぬるま湯に加えて、道元の初期の創造性の赤ん坊をある意味投げ出すことなしに、この表面的不一致をどう考えたら良いかということである。石井は、道元の晩年に撰述された主な文献の研究には、十二巻本『正法眼蔵』だけでなく、『永平広録』の後半の巻や『宝慶記』をも含めたすべての著作の研究が必要だと信じている。後者は、『永平清規』を含む修行道場の規則に関する小論と同様に、入宋の直接の所産でないと仮定した上で。

その課題の興味深い点は、身心脱落のもともとの概念である無所得の坐禅の強調を維持しながら、業の報いとそれに相応した悔い改めに基づく因果関係に集中し、様々な著作の主題の焦点への広がりを観察していることである。石井は『永平広録』の語調が鎌倉行化の後どれほど著しく変わっているか、一方、坐禅が戒律より基礎的であるという見方を含めて、初期の段階の作品から坐禅に対する概念を守る姿勢が揺らぐことなく残っている事を明らかにした。『永平広録』の変化は、従って主に教義上のことよりもむしろ修辞上のことと言えるであろう。

石井は『永平広録』のテキストを二つの部分に分ける。詮慧と懐契によって鎌倉行化の旅の時期を通して書かれた巻一から巻四と、義演によって道元の人生の最晩年について書かれた巻五から巻七である。石井は最後の三巻で一つの重要な変化を発見した。道元はもはや『宏智録』の言葉に大きな影響を受けなくなったことである。その引用が減っているのである。しかし一方、坐禅や因果や公案解釈に関する概念の著しい変化は見られない。『永平広録』撰述のもう一つの視点は、巻三の二五―上堂が、永平寺に戻って鎌倉行化以後の時代の始まりであり、道元が病のために人前で説法するのを止めるまでの最後の五年間の法堂での正式な上堂が、全体の半分以上、二八〇も記されていることである。

十二巻本『正法眼蔵』だけが、道元の晩年を代表するとする独占的強調の議論にもかかわらず、石井は初期の袴谷と松本の部分的な支援者であり、社会的責任のために当時必要とされた縁起・因果・仏性といった古典的理論に関わる道に対する曹洞宗の見解の根本的修正を引き起こそうとする批判仏教の見方を支持し続けた。そして仲間たちが社会的論争に直接コメントすることをしなかったのとは異なる態度を取った。時には耳障りな修辭法や人格攻撃に特徴づけられる教義的論争の中で、石井の温和な議論は現代社会との密接な関わり合いを思慮深く考えつつ、それぞれの歴史的文脈の中で道元の著作を丁寧に説明しようとする献身性に基づいている。これは道元の教えのエッセンスを壊すことなく、伝統

的な考えに独創性を持って取り組む事の必要性を思い出させてくれる歓迎すべき契機であった。原文への忠実さと解釈の問題への石井の取り組みは、禪が仏教の真の形だという事を否定する批判仏教の急進的な変革者の論理と、新宗学（一九九八）を唱え中道の立場を明確に主張して批判を斥ける伝統的立場に対して、折衷的な立場を投げかけた。

石井にとって鏡島の注意深い出典研究は、新宗学に影響された中心的モデルとして働いた。このアプローチは中立で公平であり、過去からの覆われていない真理の多数の重なりの中で、それは学問的意思決定と同じように現在の宗教制度上にも影響力を持っている。一方、鏡島は石井の折衷的立場を最も合理的アプローチと考えた。なぜなら石井は十二巻本『正法眼蔵』の役割を強調しすぎないようにし、また道元の初期のものも晩年に加えられた著作も控えめに扱ったためである。

道元の人生の多面的な変化を理解するために、石井は道元がそれぞれの場面で何を言い何を書き残したか、あらゆる視点から研究することが必要だとする。そして十二巻本のようにある時期の一つのテキストに限定するのは充分ではないという。それは、実は一定の視点を示しているのではなく多様な声を用いてそれぞれの影響を反映して様々なメッセージを伝えているからである。おそらくこの分野のこの視点への石井の貢献の最も適正な評価基準は、たとえ彼が文献の役割に対する批判仏教の独占的な見方に完全に同意しなかったとしても、結局のところ、誰よりも研究意欲の旺盛な研究者であったと言われるだろう。彼はおそらく『四馬』及び『正法眼蔵』の他の巻について最も徹底的で洞察に満ちた分析を提供し、晩年の付属的著作、同時にまた中国禅の影響の受容に関して道元特有の説き方を詳細に説明したのだから。しかし石井の最終講義は、主に道元の公案の借用と坐禅に関する教えについて述べられ、十二巻本『正法眼蔵』と批判仏教の唱道者による欠落部分については触れられていなかった。

参考文献

- Bein, Steve, trans.
2011 *Purifying Zen: Watsuji Tetsuro's Shamon Dogen*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Heine, Steven
2008 A day in the life: Two recent works on Dogen's *Shobogenzo* "Gyoji" [Sustained practice] fascicle. *Japanese Journal of Religious Studies* 35: 363-17.
Hubbard, Jamie, and Paul L. Swanson
1997 *Pruning the Bodhi Tree: The Storm Over Critical Buddhism*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Ishii Shudo 石井修道
1987 *Sodai zenshushi no kenkyu* 宋代禅宗史の研究. Tokyo: Daito Shuppansha.
1988 *Chugoku zenshushiwa: Mana "Shobogenzo" ni manabu* 中国禅宗史話—真字『正法眼蔵』に学ぶ. Kyoto: Zen Bunka Kenkyujo.
1990 Recent trends in Dogen studies. Albert Welter, trans. *Komazawa Daigakuzen kenkyujo nenpo* 7: 219-64.
1991a *Dogen Zen no seiritsu-shiteki kenkyu* 道元禅の成立史的研究. Tokyo: DaizoShuppan.
1991b Saigo no Dogen: Junikanbon "Shobogenzo" to "Hokyoki" 最後の道元—十二巻本『正法眼蔵』と『宝慶

- 記』. In *Junikanbon Shobogenzo no shomondai*
 十二卷本『正法眼蔵』の諸問題, Kagamishima Genryu 鏡島元隆 and Suzuki Kakuzen 鈴木格禪, eds., 319-74.
 Tokyo: Daizo Shuppan.
- 1998 Shugaku, Zenshushi to shin “shugaku” 宗学・禅宗史と新「宗学」, parts 1-3. *Shugaku to gendai* 2: 119-304.
- 2000 Kung-an Ch’an and *Tsung-men t’ung-yao chi*. In *The Koan: Texts and Contexts in Zen Buddhism*, Steven Heine and Dale S. Wright, eds., 110-36. New York: Oxford University Press.
- 2001 “Shime” ko 「四時」考. *Komazawa Daigaku Bukkyogakubu kenkyu kiyo* 59: 19-87.
- 2007 *Shobogenzo* “Gyofji” ni manabu 正法眼蔵「行持」の詳考. Kyoto: Zen Bunka Kenkyujo.
- 2014 Saishu Kogi: Chugoku Zen to Dogen Zen—Sono renzoku to hirenzoku to nitsuite 最終講義—中国禅と類元禅—その連続面と非連続面について.
 Presented at Komazawa University (24 January).
- Kagamishima Genryu 鏡島元隆**
- 1965 *Dogen Zenji no in'yo kyoten, goroku no kenkyu* 道元禅師の引用経典・語録の研究. Tokyo: Mokujisha
- 1987 *Dogen Zenji no in'yo toshi, goroku nitsuite: Mana “Shobogenzo” o shien toshite* 道元禅師の引用灯史
 ・語録について—真字「正法眼蔵」を視点として.
Shinkyogaku ronshu 13: 245-53.
- 1995 *Dogen in'yo goroku no kenkyu* 道元引用語録の研究. Tokyo: Shunjusha
- Kawamura Kodo 河村孝道**
- 1987 *Shobogenzo no seiritsu-shiteki kenkyu* 正法眼蔵の成立史的研究. Tokyo: Shunjusha.
- Schluter, Morten**
- 2010 *How Zen Became Zen: The Dispute over Enlightenment and the Formation of Chan Buddhism in Song-Dynasty China*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Sugio Genyu 杉尾玄有**
- 1977 Okyoshi aogitaki ni mondai: “Menjuji datsuraku” no koto oyobi Fukanzazengi no shofu no koto 御教示 仰ぎたきの二問題—「面授時脱落」のつと及び『普勸坐禅儀』の書風のつと. *Shugaku kenkyu* 19: n.p.
- 原載 Steven Heine [Review article] Ishii Shudo's Contributions to Dogen Studies—Examining Chinese Influences on the *Kana* and *Kanbun* Texts (「Japanese Journal of Religious Studies」(二〇一四年四一巻二号)「南山大学南山宗教文化研究所」)
- 著者 ステイブ・ハイネ
 フロリダ国際大学、宗教学・歴史学教授、アジア研究所所長。
- 訳者 若山悠光 駒澤大学大学院仏教学専攻博士課程
- 脚注
1. 新しく創設された寺は、初め「大仏寺」と名付けられ、一二四六年に「永平寺」と改

名された。

2. Carl Bielefeldt, William Bodiford, Bernard Faure, T. Griffith Foulk, Miriam Leving, John McRae, Mario Poceski, David Putney, Morten Schlüter, and Albert Welter: 等を含む。
3. 石井の著作の中には、『宗門燈要集』を一一三三年と記したものがあがるが、後の研究により、四〇年早いこの日付に改めた。
4. より詳細で最新の引用研究が鏡島によつて編集された。(一九九五年)

石井の駒澤大学における最終講義は「中国禪と道元禪―その連続面と非連続面について―」(『駒澤大学仏教学部論集』第四五号、二〇一四、所収)、研究歴は「これ人にあふなり―わが禅研究の歩み―」(『駒澤大学禅研究所年報』第二六号、二〇一四、所収)参照。尚、翻訳に当たっては、鶴見大学仏教文化研究所兼任研究員、古瀬珠水氏にご指導いただいた。ここに深く感謝申し上げます。